■低学年における漢字の覚えさせ方

記憶の仕方には、機械的記銘法と論理的記銘法との二つがある。前者はいはゆる“丸暗記”といふもので、普通には、「がむしゃらな反復練習」によるものが多い。

ところが、幼児期は丸暗記が最も得意な時期であって、反復練習などしなくても、たいていの事が覚えられる。それも、「覚えよう」といふ努力なしに、ひとりでに覚えられるものだから、何の負担もかからない。それで、私は、幼児期の学習を「無努力・無負担の学習」と呼んでゐるわけである。

小学校の一・二年生は、このやうな幼児期の特性をもってゐて、丸暗記にすぐれた能力を発揮することが出来る。だから、この時期には、「漢字で表記できる言葉は、すべて漢字で表記して提出する」やうにすれば、ただそれだけの事で、年間に五、六百の漢字が楽々と覚えられるやうになる。

（これらの漢字の“書き”は、原則的に言へば、その漢字が教科書に新出された時に学習させればよい。“読み”と“書き”との間に時間的な隔たりがあればあるほど、書きは容易に速成される。これが「読み書き分離」を主張する根拠である。新出で「読み書き同時」達成は土台無理なのである）

私がこの方法を推進するために、「漢字は学年配当表にとらはれた指導をしてゐてはだめだ」と主張したのは昭和三十年代であるが、その頃の文部省は、「配当表無視は指導要領違反であり、法令違反になる」と言って責めたが、今では、文部省の刊行図書に、「学年配当表にとらはれた指導をしていては、漢字学習の効果はあがらない」と書かれてゐる。これが本当なのである。

低学年の漢字指導では、「漢字で表記できる言葉はすべて漢字で表記して提示する」ことが、最も手軽に出来て、しかも最も有効な方法である。一千字の漢字を読めるやうにすることは容易で、それが出来たら、中・高学年の漢字学習は必ず成功しよう。

「字源的な方法による指導」は、中学年以降にはぜひとも必要な指導法であるが、この時期にはほとんど必要がない。簡単に丸暗記できる時期に、字源的な説明に時間を費すのは時間の浪費に近い。